

# 大菩薩峠

——映画文学人生論

原作：中里介山 (1913-1941年)	「都新聞」ほか
監督：内田吐夢 (1957年)	脚色：猪俣勝人
出演：机竜之介 片岡千恵蔵 柴英三郎	
宇津木兵馬 萬屋錦之助 三木滋人	撮影：三木滋人
裏宿七兵衛 月形龍之介 深井史郎	音楽：深井史郎
お浜・お豊 長谷川裕美子 丘さとみ	お松：丘さとみ

大菩薩峠は江戸を距（さ）る三十里

中里介山が一九一三年（大正二年）から一九四一年（昭和一六年）まで二十八年かけて執筆し続けた長編小説『大菩薩峠』の冒頭は次の通り。

大菩薩峠は江戸を西に距（さ）る三十里、甲州裏街道が甲斐国東山梨郡萩原村に入って、その最も高く最も険しきところ、上下八里にまたがる難所がそれです。標高六千四百尺。

江戸を西に、中山道ではなく、東海道を大手町から芦ノ湖まで箱根駅伝の走者とともに走れば、片道約二十七里。ほぼ似たような距離だが、駅伝のほうが三里ほど短い。

駅伝走者並みの健脚を誇る裏宿七兵衛（内田吐夢監督の映画では月形龍之助）は、大菩薩峠で机竜之助（片岡千恵蔵）が老巡礼を斬殺する現場を目撃する。いわゆる理由なき殺人で、竜之助本人もなぜ殺したのかよくわからない。巡礼の孫娘お松（丘さとみ）の世話は七兵衛が引き受ける。

時は幕末、安政の大獄で勤王の志士たちに弾圧が加えられていた頃。机竜之介は、峠のふもとの武州沢井村の沢井道場の若師範として、音無しの構えで知られる剣の達人だが、心を病んでいた。甲源一刀流師範宇津木文之丞の妻お浜（長谷川裕美子）を犯し、御岳神社の奉納試合で文之丞を斬



# 大菩薩峠

映画文学人生論

殺、お浜と江戸へ出奔。辻斬りを働いたり、新撰組に入ったり、天誅組に参加したりする。大義名分も義理人情もない。こんな滅茶苦茶な男には、勤王も佐幕もあつたものではない。

そんな机竜之助でもお浜が生んだ息子郁太郎に對する父親らしい感情はあつた。しかし、それも笛吹川の大洪水に遭遇するまでである。内田吐夢監督の映画では濁流の向こうに郁太郎の泣き声を聞き、「危い郁太郎、父の手にすがれ」と言つて水中に引き込まれるところで終わっている。

ところが、原作ではその後も竜之助は登場し続ける。「拙者というものは、もう疾（と）うの昔に死んでいるのだ。こうやっている拙者は、ぬけ殻だ。幽霊だ。影法師だ」などといひながら。

中里介山は、人間界の諸相を曲尽して、大乘遊戯の境に参入するカルマ曼荼羅の面影を大凡下の筆にうつし見んとしてこの長編を書いた。自分がモデルの仏頂寺弥助に次のセリフを言わせる。

「高杉晋作は、尊皇攘夷のために生きています。徳川慶喜は、傾きかけた徳川幕府の屋台骨のために生きなければなりません。西郷吉之助は薩摩に天下を取らせんがために生き、机竜之助は無明の中に生きています」

そして、自分自身と相棒の丸山勇仙は、「松茸の土瓶蒸を食わんがために生きています。あつ、は、は、は、は」。

大菩薩峠に音無し影法師